

東海の古代

第252号 2021年8月

会長 : 竹内 強
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

四隅突出型墳墓

一宮市 畑田 寿一

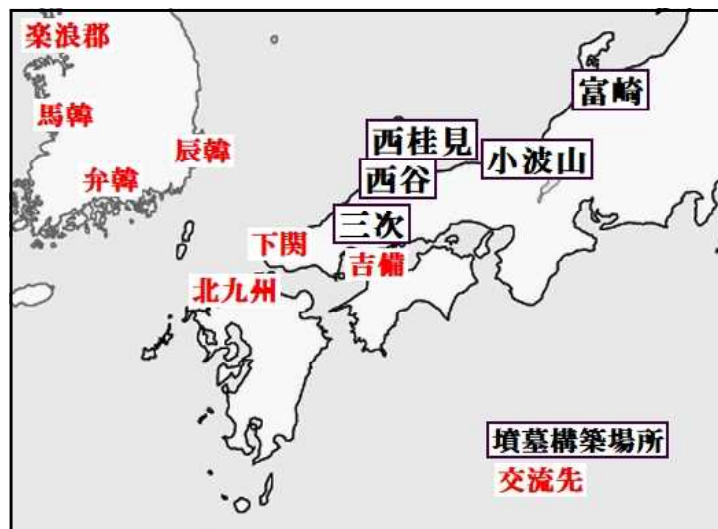
古代出雲の文化は、朝鮮半島北部の鴨緑江付近の文化と類似点が多いが、なぜかこれを否定する通説が多い。四隅突出型墳墓について若干の類似は認めるが同様なものは他にもあるとし、小型の銅鐸についても銅鐸は日本独自文化とする姿勢を崩さない。銅矛については朝鮮半島全体の文化とし、鋳型の発見から国産の姿勢を崩さず、多紐鏡や方格鏡は卑弥呼の貰った鏡とは関係なしとしている。しかし、当時の勢力は明らかに出雲の方がヤマトを上廻っていた。

今回は四隅突出型墳墓を中心に朝鮮半島北部との関係を眺め直し、卑弥呼畿内説が見直し時期に来ていることを論じてみたい。

1 四隅突出型墳墓の歴史

一般には中国山中の三次地方が発祥の地と考えられている。しかし、出雲や松江地方で方墳の四隅が僅かに伸びているものをもって出雲を発祥の地とする説もある。墳墓はその後出雲の西谷遺跡に引き継がれ、松江地方から福井、富山を経て福島県の館ノ内遺跡まで広がった。

時期的には2世紀から3世紀前半にあたり3世紀中頃に突然姿を消す。3世紀後半には前方後円墳、後方墳が造られるようになり、これをもってヤマト支配を主張する説もあるが、前方後方墳などに対する説明が出来ず、説としては妥当では無い。

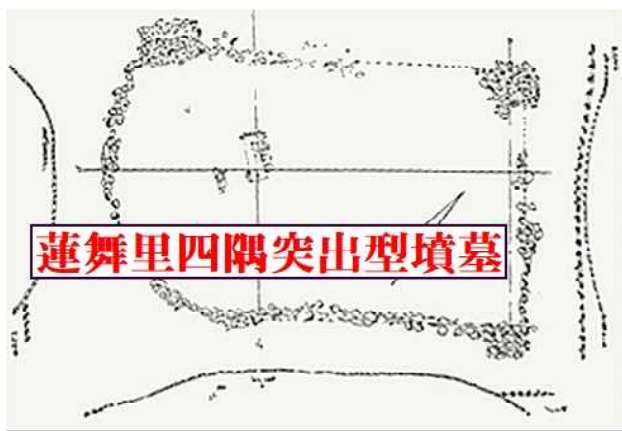


2 四隅突出型墳墓と朝鮮半島北部

研究の初期段階では朝鮮半島からの流入説もあったが、現在では国内発生説が主流になっている。しかし、朝鮮半島北部の鴨緑江付近の**蓮舞里遺跡**からは四隅突出型墳墓や貼石遺跡が、**雲坪里遺跡**からは銅鐸が出土し、日本固有とされている物が存在した。

日本の四隅突出型墳墓とは違うとする説もあるが、最終段階での蓮舞里2号墳を見る限り同じ構造をしており、副葬品にも共通点がある。仮に共通性を認めれば、時代的に朝鮮半島から来たものになる。

中国遼寧省	高力墓子村1号墳	紀元前後から2世紀
北朝鮮慈江道	豊清里1号墳 南坡洞33号墳 西海里第2古墳群1号墓	
	蓮舞里2号墳	遅くとも2世紀



3 西谷遺跡の出土品と祭祀

西谷墳墓群の発掘に深く関わってきた出雲弥生の森博物館名誉館長の渡部貞幸氏が著した『出雲四隅突出型墳丘墓』（新泉社、2018年）に拠ると、四隅突出型墳丘墓には次の特徴がある。

（1）出土品

四隅突出型遺跡の最大は西谷9号墳（43 x 34m：出雲市）で、西谷遺跡では2世紀後半から3世紀前半に掛けて、3号、2号、4号、9号の順で造られたと考えられている。9号遺跡は現在神社が建っており、殆ど発掘が進んでいないが、3号墳では次のような他にない出土品がみられる。

種類	産地	状況
土器	吉備 丹越 朝鮮系土器	葬祭土器 脚付土器など。出雲以外の土器が35%を超える 付近の山持遺跡から楽浪、三韓、靺鞨土器など
朱	中国産	3号墳全体で30Kg使われている
刀剣	朝鮮半島	40cm程度。原料は朝鮮半島の鉄鉱石
ガラス玉	ペルシャ？ 中国北部	ソーダ石灰ガラス製管玉 鉛バリウム製玉、勾玉など総計250点

いずれの出土品も朝鮮半島や中国大陆との関係を示しており、朝鮮半島ではほぼ全域との交流があったと思われる。

（２）祭祀

木棺と木槨で構成された棺には大量の朱が入れられており、これを土で覆った上に玉砂利が引かれ、中央には朱を塗った石の玉が置かれていた。周囲には４本の柱が建てられ、勢力内各地の煮炊きの痕がある土器が大量に出土した。

この状況に対して、前出の渡辺氏は「祭祀には各地から代表者が集まり、一緒に食事をする「直会」が行われていたことを意味するのでは無いか。」と想定している。柱の上に屋根があったか否かは判断出来ないが、伊勢神宮の心柱や新嘗祭に通じるものがある。

（３）階段状墳墓

西谷９号墳は３段築造構造をしている。吉備の築盾古墳は、形状は違うが同様な階段築造構造であり、九州高良山の祇園古墳も同様の構造をしている。階段構造の墳墓は高句麗に端を発しており、段数は地位を表していると考えられるので、これらの墳墓の被葬者は出雲の国を代表する者であった。

（４）大王の存在

西谷墳丘墓群では４基の四隅突出型墳丘墓が造られ、時代を経るに従い大型化していった。１００年程度の期間に４代の大王が存在したと思われる。同じ時期に他の地域でも四隅突出型墳丘墓は造られるが、規模・出土品からみてこの地域に大王がいたとみて間違いはない。しかし、最大規模の９号墳が造られた後、墳丘墓の構築は途絶える。代わって斐伊川の中流域に神原神社古墳（方墳）、松本１・３号墳（前方後方墳）が造られる。新しい勢力の台頭であろう。これをヤマトタケルがイズモタケルを討ったとする『古事記』の記述に擬える説もあるが、真実の程は分からない。

４ まとめ

この時代、九州には卑弥呼を祭主とした九州王朝があり、出雲には四隅突出型墳墓を祀る出雲王国が、吉備には楯築遺跡に代表される吉備王国があった。大和は恐らくニギハヤヒが権力を握っていたと思われる。ヤマト王朝の登場は４世紀まで待たねばならず、勢力範囲もヤマト周辺で、近江、尾張、美濃は友好関係にあった。

四隅突起型墳墓も現在は国産説が有力であるが再検討が必要では無いか。朝鮮半島からリマン海流に乗って朝鮮半島東部、対馬を経て出雲や敦賀に流れ着く。このルートは９世紀に渤海国がよく利用したが、早くから拓けていたと考えられる。

墳墓の造られた地方や出土する土器などをみると、山陰地方を中心に瀬戸内海側は備中（岡山）、吉備（岡山）、北陸では越中、越後、遠くは福島県まで交易ルートが伸びていた。この時代、出雲は日本海側の覇者であるだけでなく、瀬戸内海の一部も手中に収めていたと考えられる。

朝鮮半島からの輸入品を見ると朱など高額な品が多い。この代価は何をもって支払ったか。通説では生口（ドレイ）とされているが、筆者はウルシを挙げたい。三次地方はウルシの産地であった。天然のウルシは柔らかく傷が付き易いが鉄分を加えた黒ウルシは固く耐久性がある。

ガラス玉についても長石の綾羅木郷（下関）、重晶石（バリウムの鉱石）を産する笠取（京都）などがあり、全てを国外に求めなくても国産の可能性はある。

山陰地方には未知のロマンが満載であり、今後の発掘に期待したい。

特異な形状の古墳「四隅突出墳」

名古屋市 石田 敬一

1 四隅突出型墳丘墓の名称のおかしさ

一部の学者が卑弥呼の墓と主張されている箸墓古墳、それより以降の墳丘墓を古墳として、古墳時代と呼ぶ習わしになっていますが、近年箸墓古墳より古い前方後円墳が各地で発見され古墳時代の区分や名称は既に陳腐なものになり、また前方後円墳の発祥地が不明なことから、ヤマトが古墳時代から列島統一をしたとする近畿一元説は破綻しています。

また、弥生時代の墳丘墓も古墳と同様に古い墳丘を持った墓であり、その論理の平等性からして墳丘墓を含めて古墳と呼ぶのが適切な用語の使用です。したがって、古墳の種別の1つである前方後円墳と同じ型式で四隅突出型墳丘墓を呼称すれば、「四隅突出墳」（以下これに従う）が妥当です。おかしな考えの基に名称が是正されないのは、画一的な考えに固執しているからであり、古代を探る上で大きな妨げです。

2 発祥地の決め手は発展過程

四隅突出墳の発祥地を求めるときに留意しなければならないのは、時代と共にその四隅が大きく発展していく過程がわかる地域であるかどうかです。前方後円墳も同様です。

森浩一（考古学者、同志社名誉教授、1928～2013年）や、大塚初重（考古学者、明大名誉教授、1926年～）の説では、朝鮮半島の付根にあたる鴨緑江流域に方形墳のコーナーを大きな石で強調した積石塚があることから、鴨緑江流域に四隅突出墳の源流の一つがあったのではないかとされます。しかし、指摘された牛河梁遺跡の積石塚は、紀元前20～10世紀頃の石器時代の遺跡であって時代が離れすぎていることと、あくまで四隅に大きな石があるのみで外へ突出している形状ではありません。また、その後の特徴的な四隅突出墳に至るまでの発展過程が見えません。

また、北朝鮮の慈江道の西海里第2古墳群1号墓や連舞里古墳群2号墳を四隅突出墳の原型と見なす説もありますが、築造時期からみて時代が古い日本列島における四隅突出墳の原型が、その文化と共に朝鮮半島に影響を与えたとみるべきでしょう。

いずれにしても、大陸や半島には、四隅突出化の発達途中の古墳や四隅突出墳が揃って存在しませんから、鴨緑江流域の石積塚が四隅突出墳の発祥地であるとはいえません。

3 四隅の突出化は紀元前後の「江の川」中流域

島根県および広島県を流れる中国地方最大の河川、江の川の中流域にある広島県庄原市・三次市の遺跡では、周溝墓から四隅突出墳に形状が変化していく一連の墳丘墓が揃って見つかっています。江の川の中流域の広島から始まった四隅の突出化は、岡山・鳥取・島根に広がり、さらには北陸などへと日本列島を西から東方へと伝播するとともに、四隅がより大きく特徴的に発達していったと考えられます。

広島県庄原市の佐田峠墳墓群では、方形周溝墓（5号墓）、隅の突出が認められる方形台状墓（1号墓、2号墓）、隅の突出が顕著な方形貼石墓（4号墓）、四隅の突出が大型化した四隅突出墳（3号墓）が発見されています。1世紀初めには既に四隅が突出しており、墳丘の形状が徐々に変化し、1世紀後半には四隅の突出が顕著な四隅突出墳に発達してきた状況がよくわかります。四隅突出墳には、弥生時代中期後葉の指標土器である塩町式土器を伴うことから、四隅が突出し始めたのは紀元前と考えられます。

四隅の突出化の発達状況からすれば、四隅突出墳は、中国地方、江の川の中流域に発祥し、そこから周囲に広がった日本独特の埋葬文化と考えます。

東海市 大島 秀雄

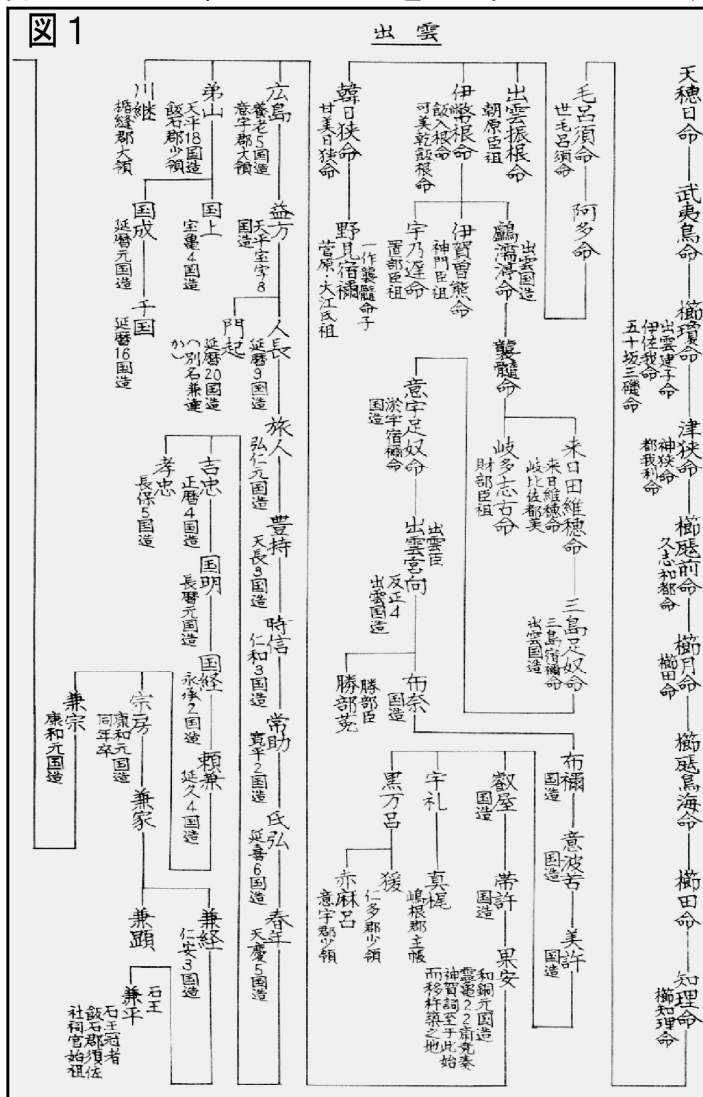
1. はじめに

3世紀前後の時期の大型四隅突出型墳丘墓としては、島根県出雲市の西谷古墳群の2号墓、3号墓、4号墓、9号墓が、また島根県安来市の塩津山墳墓群の6、10号墓が知られ、弥生時代後期には出雲地方の東西に大きな政治勢力が形成されていたものと考えられています。

そして、一部の考古学の研究者からは4世紀前半に出雲平野を含む日本海沿岸地域で前方後円墳が一斉に出現していることに注目され、楽浪郡の滅亡などの政治的混乱により交易拠点の福岡市・西新町遺跡や出雲市・古志本郷遺跡が衰退して朝鮮半島との交易上の優位性が無くなり、代わって4世紀中頃には朝鮮半島南部との直接的な交易にヤマト王権が乗り出していったものとの見解が示されているので、これらを踏まえて出雲国造家系図の信憑性を考えてみたいと思います。

2. 出雲国造家系図の相違点

出雲国造家系図は『古代豪族系図集覧』（近藤敏喬編、東京堂出版、1993年）に図1のように掲載されていますが、『神道大辞典』（平凡社、1941年）には図2のような系図が紹介されており、その大きな違いは次のとおりです。なお、図1、図2共に掲載したのは系



図の前半部分のみです。

①『日本書紀』崇神天皇六十年条に出雲の神宝にまつわる紛争の記事関連で出て来る出雲振根、飯入根、甘美韓日狭うかすくぬと鷗濡淳が図1には見えるが、図2には見えない。

②『古事記』垂仁紀の岐比佐都美を図1では来日田維穗命と同一人物としているが、図2では岐比佐都美は出てこない。

图 2

天穗日命 — 武夷鳥命 — 櫛瓊命 —
 津佐命 — 櫛瓊前命 — 櫛月命 —
 櫛瓊鳥海命 — 櫛田命 — 知理命 —
 毛呂須命 — 阿多命 — 氏祖命 —
 襲髓命 — 来日田維穗命 —
 三鳥足奴命 — 意宇足奴命 — 宮向 —
 布奈 — 布禰 — 意波苦 — 美許 —
 叡屋 — 帶許 — 果安 — 廣島 —
 弟山 — 益方 — 國上 — 國成 —
 人長 — 千國 — 兼連 — 旅人 —
 豐持 — 時信 — 常助 — 氏弘 —
 春年 — 吉忠 — 國明 — 國經 —
 賴兼 — 宗房 — 兼宗 — 兼忠 — 兼經

3. 出雲国造とは

出雲国造がどのように説明されているのか、代表的な辞書からみてみよう。

① 世界大百科事典（第2版、平凡社、1998年）では、

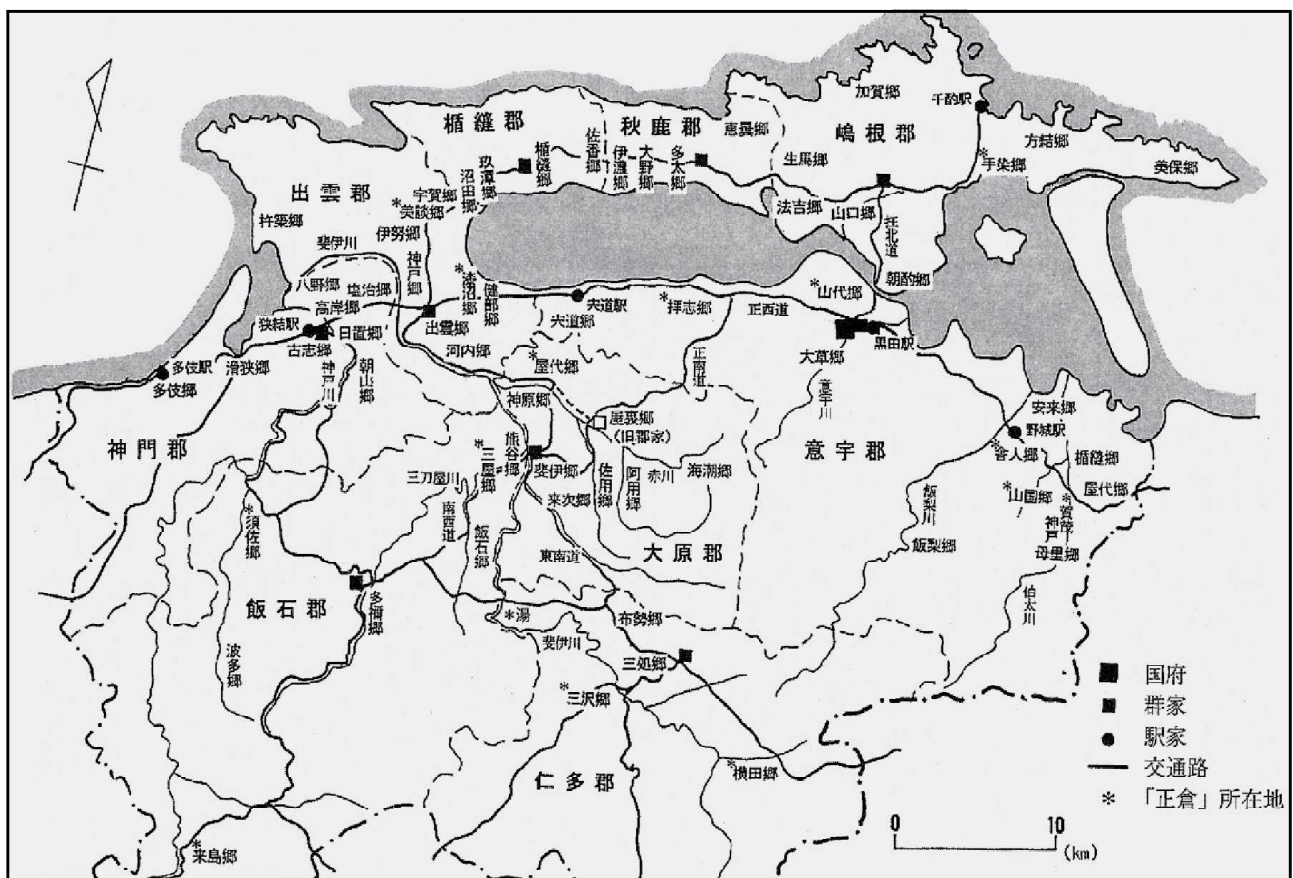
古代出雲の豪族。出雲東部の意宇（おう）平野を本拠として台頭し、5世紀末から6世紀前半には出雲全域にわたる地域国家を形成し、その王として君臨した。しかし6世紀後半から、まず出雲西部に、ついで意宇平野の東にもヤマト朝廷の制圧が及んでくると、服属して出雲国造とされた。（以下、省略）

② 日本史辞典（角川書店、1996年）では、

古代出雲の在地首長。出雲東部を本拠に、天穗日命を祖として出雲臣を称した。令制下では意宇郡大領に任命され、国造就任時に神賀詞奏上など補任儀礼を行った。代々、出雲大社の祭祀をつかさどり、南北朝期に千家・北島の両家に分かれ、今日に至る。となっており、②の8世紀に入ってから話に異論はないが、①の5～6世紀の話が史実なのかは確たる史料もなく、前出の出雲国造家系図でも王を称する人物が見当たらないことから、このように断言してよいものやら理解に苦しむところです。

『先代旧事本紀』国造本紀では、出雲国造の初代を、瑞籬朝（崇神天皇）の御世に天穗日命の十一世の孫である宇迦都久怒命（書紀では鷗瀦淳）としており、図1の系図でもこれを踏襲している訳ですが、そもそも国造制とはおよそ6～7世紀に実施された地方支配制度であり、ヤマト王権が政治的関係を結んだ各地の有力氏族を国造に任命して、当該地域の支配権を保証したとするのが通説であり、国造本紀の宇迦都久怒命を初代出雲国造とする記述は誤記と考えます。

『出雲国風土記』によれば、出雲臣氏が大領なのは意宇郡と楯縫郡のみであり、出雲大社がある出雲郡の大領が日置臣氏となっていることから、出雲氏がいつ「出雲臣」を称するようになったのかも問題なのですが、出雲国造を名乗ったのは図1の系図が示す果安の和銅元年（708年）からではないかとも考えられます。



出雲国風土記関係地図（『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣、2009年より転載）

4. 出雲臣の初見と出雲国造

『続日本紀』によれば、出雲狛は大宝二年（702年）8月に従五位下に叙せられ、同年9月には臣姓を与えられているので、『日本書紀』の壬申の乱に見える出雲臣狛の表記は、筆者が「東海の古代」第249号の「壬申紀の誇張・改変から見えてくること」で話題にした壬申の乱の功臣の後裔が書紀の改変に係わった事と同様な事例であろうと考えます。

地方の出雲氏が中央に進出した出雲氏より早く「臣」姓を名乗ったとは考えにくく、また、『日本書紀』斉明天皇五年条に出雲国造に命ぜられて神の宮を修造させられたとの記事があるが、当時の出雲郡の支配者は下記5項の内容から日置臣氏と思われ、また出雲臣果安が杵築大社に移ってきたのが霊亀二年（716年）なので、この書紀の出雲国造の記述は壬申紀の出雲臣狛の表記と同じく書紀の改変かも知れず、出雲国造は大宝令による一国一國造の「新国造」であった可能性が考えられます。

5. 出雲郡の支配者

『日本書紀』崇神天皇六十年条の出雲振根、飯入根、甘美韓日狭、鷗濡淳の四名は出雲郡の支配者の一族であり、出雲国造家とは別の氏族であるのは図2の系図からも容易に想像されます。

国造本紀の宇迦都久怒命が、出雲郡宇賀郷や宇迦能山に関係がありそうなことや、出雲市には石の異名である雲根を称する雲根神社があり、同じく出雲市の比那神社には石神様が祭られていることから、想像をたくましくすれば、出雲振根とは石神様の別名であったのかもしれませんが。

これらの後裔氏族について、太田亮著の『姓氏家系大辞典』の神門臣の項では「此の氏の出所は、姓氏録、右京神別に「神門臣、同上（出雲臣祖鷗濡淳命の後）」と。また出雲国造系図に「氏祖命、亦の名は宇賀都久野命、神門臣云々等の祖、」とありて姓氏録と一致す。」とあり、神門臣氏が第一候補にあげられますが、神門臣氏が出雲臣氏と同族であるとするのは誤記でしょう。

出雲郡の南隣には神門郡があり、神門郡は『日本書紀』推古二十五年（617年）条に出雲国から「神戸郡に瓜有り。大きき缶の如し」と言ってきたとあり、当時、正しくは神戸評と表記されていた可能性もありますが、神門郡が杵築大社（出雲大社）の「神郡」（郡内の租・調・庸を特定の神社のものとする制度）であった可能性があります。

図1の系図によれば、出雲臣果安が霊亀二年（716年）に杵築の地に移ったとされており、果安の時代の熊野神社や杵築大社の「神郡」は意宇郡であったので、推古朝の神門郡や出雲郡の支配者は出雲臣氏とは別の氏族であった可能性が考えられますが、先ほどの『日本書紀』推古二十五年条の記述からしてヤマト王権と敵対関係にあったとは思われません。

なお、霊亀二年（716年）の「出雲国造神賀詞」奏上は、国家からの要求ではなくて、出雲臣果安からの働きかけによるものであるとの意見があり、もしそうであるならば、出雲臣果安は正に中興の祖とでも言うべき人物ではないでしょうか。

『出雲国風土記』によれば、神門郡の大領が神門臣氏で、出雲郡の大領が日置臣氏なので、『日本書紀』垂仁天皇三十九年条の十種の品部の1つに日置部が載せられており、日置部氏は神事に最も関係の深い氏族ではないかとされていることや、6世紀後半に築造の松江市岡田山1号墳出土の「額田部臣」銘入大刀からヤマト王権が出雲に部民制を導入したのは欽明朝ではないかとされ、この頃に日置臣氏も出雲郡に入部し、神門臣氏に代わって杵築大社の神事を執り行い、後に神事を出雲臣氏に委ねて出雲郡の支配に専念したとも考えられます。

また、『出雲国風土記』の神門郡条日置郷には、「郡家の正東四里、志紀嶋宮御宇天皇（欽明天皇）の御世に、日置伴部たちが遣わされて宿停（とどま）り政務を執った所である。

だから日置という。」とあり、意宇郡舎人郷には、「郡家の正東二十六里の所にある。志貴島宮御宇天皇（欽明天皇）の御世に、倉舎人君たちの先祖、日置臣志毘が大舎人としてお仕え申し上げた。そしてここは、志毘が住んでいたところである。だから、舎人という。この郷には正倉がある。」とあり、出雲国の東西に日置臣氏が進出してきたことが窺われます。

6. 出雲神話との関連

『風土記から見る日本列島の古代史』（瀧音能之著、平凡社新書、2018年）によれば、「出雲氏が出雲の東部を拠点としていたときに信仰していたのはクマノ大神であったと考えられる。それが西部への勢力拡張によって、出雲全域を支配した段階において、西部の神であったオオクニヌシ（オオナモチ）を自分たちが奉斎する神として、天の下造らしし大神として、出雲全域の神と位置づけたのではなかろうか。そのオオクニヌシがまだ出雲の西部の神であったときの信仰圏の中心が朝山郷であったとみるならば、『出雲国風土記』の朝山郷の記載もスムーズに受け入れることができよう。」とされ、さらに、「スサノオ神の本貫地については、『出雲国風土記』の須佐郷の伝承が、他のスサノオ神の伝承と比較して密度が高いことを考え合わせるならば、やはり、須佐郷をスサノオ神の本拠地とするのが穏当であろう。」としています。

「記紀神話」ではスサノオノミコトは民衆の神ではなくて、天照大神の弟として登場するし、高天原で天照大神に乱暴をはたらき、追放されて出雲に来たことになっています。

これは出雲神話を天照大神中心の物語に吸収した結果であり、「記紀神話」は宮廷の貴族によって作り出されたもので、いわゆる官製神話とでもいうべきものであり、史実を探る手掛かりにするには相当な注意が必要です。従って、出雲の国譲りの時期は、上記5項で述べた如く6世紀とするのが妥当かもしれません。

7. おわりに

出雲は九州に次ぐ量の古代朝鮮半島系土器や鉄を出土しており、権力の源泉は朝鮮半島との交易の掌握にあったと思われ、『日本書紀』仁徳即位前紀に屯田司であり出雲臣の先祖として登場する淤宇宿禰の存在が古代出雲の有力な豪族であったことを示しているのかもしれませんが、早くからヤマト王権に出仕していた一族だと思われますが、図1の系図からはその様子を窺うことはできません。

記述が簡素化されている系図なので仕方がない側面もありますが、少なくとも8世紀の果安の時代からが出雲国造家の実態をよく示すものと考えられ、それ以前の世代については評価が困難であるとするのが現時点での結論ではないでしょうか。

前回の例会の内容

- 高良山の神籠石 一宮市 畑田寿一
高良山の神籠石は有明海側の防御拠点。
- 高良山の列石遺構 名古屋市 石田泉城
高良山の列石遺構は玉垂命による結界。
- 天皇の年齢(崇神天皇～応神天皇)について 瀬戸市 林 伸禧
表題の天皇の年齢について不整合を指摘。
- 最近疑問に感じている事柄 刈谷市 酒井 誠
西日本を勢力下にした出雲は鉄文化を制した集団によって消滅し列島は統一された。

例会の予定

- 例会の予定
- 1 日時 8月15日(日)13時半～(第5集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
- 3 飛び入り歓迎 参加費500円
- 来月以降の例会 9/19、10/17、11/21

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)
furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 8月28日(土)